

資料 2-2

第 2 回鳥取県津波対策検討委員会

文献資料について

平成 23 年 10 月 5 日

※下線、【西暦】【注】を追記

『1833年（天保四年）の津波の記録』

○堺港消防署沿革史

天保四巳年十一月二十六日夜【1833年12月7日】

雲州島根郡七類浦（現在の八束郡七類）に海嘯來たり。海岸線より七十三間余來装、人家田圃など一面海となる。干潮後翌日に至り田圃水溜りに多量の漁獲ある。同夜堺港もその余波をうけ港内満潮余子大明神鳥居より境内まで海水侵入交通社絶して混乱を呈するも数刻にして潮ひき平常に復せり。

【境港市役所によれば余子大明神は現在の大港神社（栄町）】

○境港沿革史 小泉□□編纂 大正四年十二月発刊

其五 海嘯

天保四年巳十月二十六日【1833年12月7日】の夜雲州島根郡七類浦の海嘯は海岸より七十三間余海水上りて人家田圃とも一面海となりて田口に数口の魚類遊泳し干潮後翌日に至り深き水溜りより魚類澤山拾ひ取りしと云ふ、同夜當湊も其餘波を被り湊内満潮、餘子大明神鳥居より境内へ海水浸入し交通社絶し一時はみな家を出て身を避んとすると幸にして数刻ならずして潮曳きみな安心したりと記録に見へたる而已ならず其當時を記憶せし老人の〇物語りを著者聞きし事あり云々。

○新修境港市史 平成九年発行

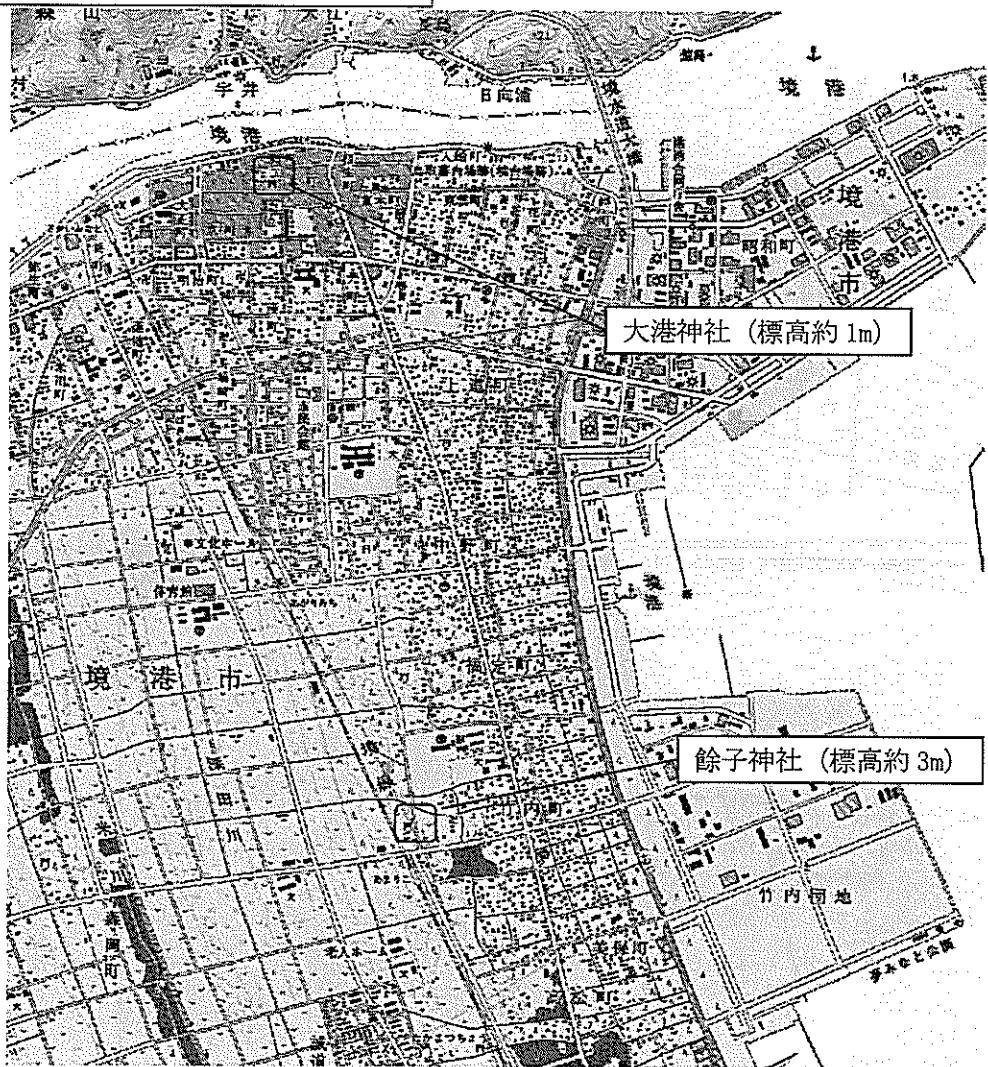
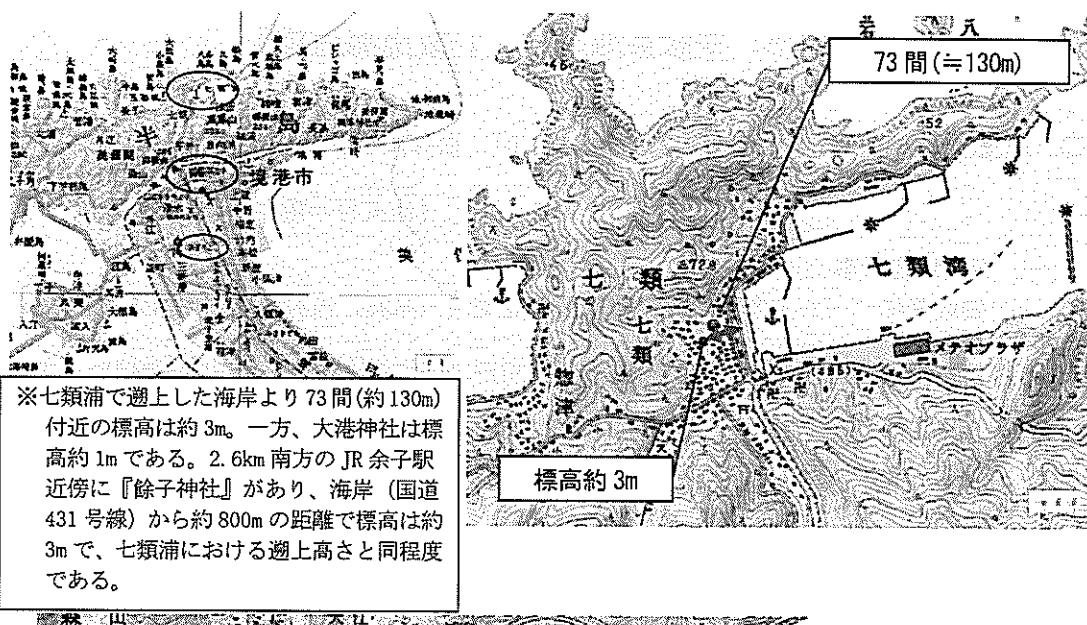
・境港周辺異常気象・異常現象略年表

一八三三	天保四・一〇・二六【1833年12月7日】	島根半島七類浦津波。海岸より七三間余り海水上る（美保関町誌）。 境港も湊内満潮、余子大明神鳥居より境内へ海水侵入（堺港沿革史）。
一八五四	嘉永七・一一・一四【1855年1月2日】 嘉永七・一一・一五【1855年1月3日】	午前八時ごろ中位の地震（歴歳記録）。 午後四時ごろ大地震（歴歳記録）。

【1854年の地震は 嘉永7年11月14, 15日ではなく安政元年11月4、5日【1854年12月23、24日】の安政東海地震・安政南海地震と思われる】

《参考》理科年表（平成20年版）

- ・1833年12月7日（天保4年10月26日） 38.9° N 139.25° E M7 1/2
羽前・羽後・越後・佐渡：庄内地方で特に被害が大きく、潰家475、死42、津波が本庄から新潟に至る海岸と佐渡を襲い、能登で大破流出家約345、死約100。



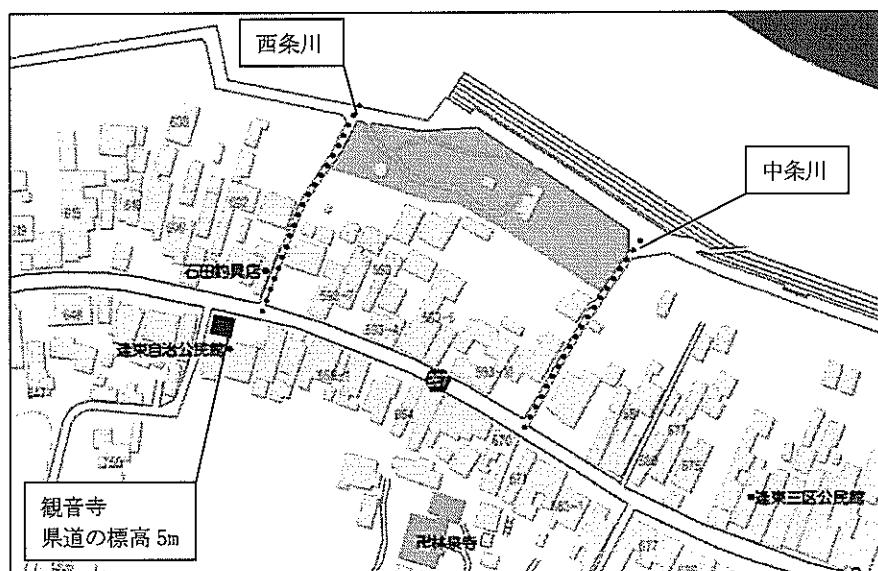
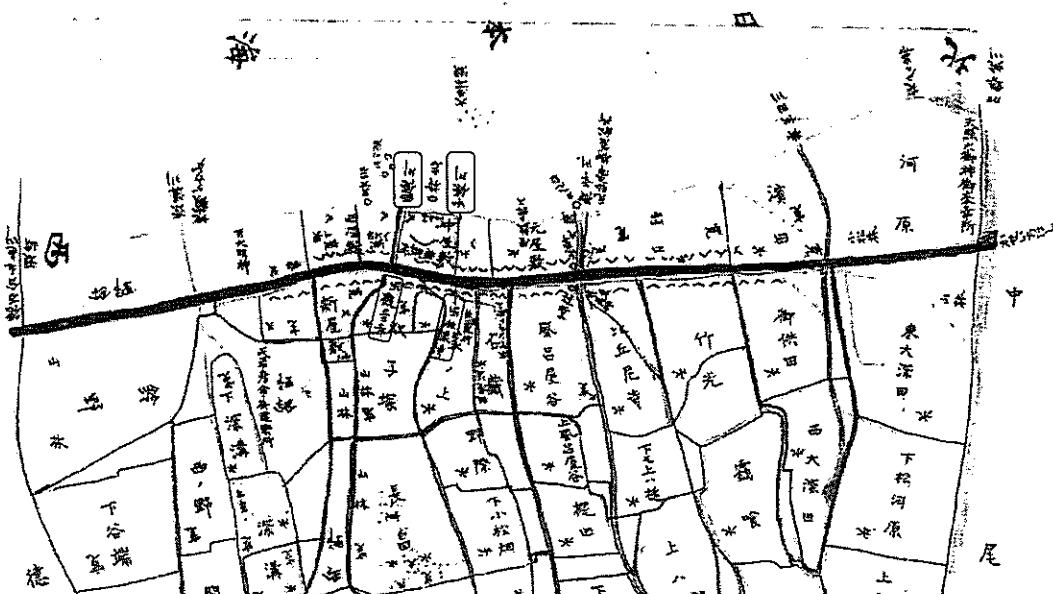
『1854年（安政元年）安政東海地震・安政南海地震』

○「逢東村史之実録」 大正一五年（一九二六年） 松井儀平著

【おうつか 逢東村=現在の琴浦町】

一、天災地変の事

「安政元年（一八五四）甲寅。諸国大地震突波（津波）当村中条川の水北側の家々に打ち掛かり、海岸は怒涛高く巻上り北浦戸口より湛え込み、篠、空き俵等にて堰き止めをなして、防御す。西条川は津波巻上がり約五十間（約91m）隔たりし観音寺門前の石垣に打ち付けたり。震うこと日夜数十度一週間以上及べり。」



○境港沿革史 小泉□□編纂 大正四年十二月発刊

其二 大地震

當地に觀する地震の記事は古書□記に至りて甚だ稀にして漸く二三の記事を探り得たれば左に紹介せむ。

文政元戌の年大地震、(黄泉津□穴□) 【1818年】

天明二虎の年大地震 (堺雜記) 【1782年】

嘉永七年 (改め) 安政元寅の年大地震、十一月四日朝五ツ時【1854年12月23日前午前8時】地震始り、五日七ツ時【1854年12月24日午後4時】□震、米子屋武助家倒れ、小西屋五兵衛土蔵大□□、安宅屋□八家大破損、□□□□酒店大破損、安宅屋久左衛門家大破損。鼻の吉野家政兵衛土蔵倒□、助四郎家大破損、茂七家大破損、その他家、土蔵、納屋等の破損せしもの一々枚挙に遑あらず而して村民はみな我家より出で畠の中或は竹藪のわきに一時住居の小屋を建築して避難したり『大東吉兵衛日記』。

○「鳥取藩、在方諸事控」

「安政元年十一月十一日【1854年12月30日】。

一、去ル五日晚七ツ時【1854年12月24日午後4時頃】より度々地震致し、村々破損所并ニ崩家等有之趣相聞候ニ付、取調書付ニシテ申達シ候様、因伯御郡々并町庄屋迄申遣シ置候、夫々申達シ候ニ付、今日帳面ニシテ長役ヨリ御家老中え御達シニ相成候事。」

「同廿七日【1855年1月15日】、

一、去ル四日、同五日【1854年12月23、24日】両日廿數度大地震、并同月十六日【1855年1月4日】之夜ハ古來稀成大風ニテ、御郡々破損所、崩家等説^{おほなだしき}敷有之趣相聞候ニ付、破損之次第眞サ書付ニシテ申達シ候様、因伯御郡々之申遣シ置候処、夫々申達シ候ニ付左之通整紙ニ相認メ、今日御家老中之申達シ候事。

御両国大地震破損所書付。

甲寅十一月四日、同五日【1854年12月23日、24日】大地震ニ付品々破損因州分

一、崩家式軒。 一、損家六軒。

一、土蔵崩四ヶ所。 一、土蔵損四ヶ所。

伯州分

一、田畠沈壊反八畝。 一、地沈壊ヶ所。 一、崩家八軒。

一、損家四拾軒。 一、土蔵崩三ヶ所。 一、土蔵損十ヶ所。

一、塙覆崩拾三間。 一、大木根返リ壊本。

・参考資料

①「日本の正史。別巻五。年表」昭和四十二年発行

「安政元年十一月【1855年1月】諸国地震、駿河、遠江、伊豆、相模の被害多大。

下田碇泊のロシア軍艦ディアナ号破損する。」

②「日本史年表」歴史学研究会編（一九六六年発行）

安政元年（一八五四）十一月四日【1854年12月23日】

「諸国大地震、下田に津波が襲い、チャーチンの乗艦ディアナ号大破沈没。」

③理科年表（平成20年版）

・1854年12月23日（安政1年11月4日） 34.0° N 137.8° E M8.4

東海・東山・南海諸道：『安政東海地震』：被害は関東から近畿に及び、特に沼津から伊勢湾にかけての海岸がひどかった。津波が房総から土佐までの沿岸を襲い、被害をさらに大きくした。この地震による居宅の潰・焼失は約3万軒、死者は2千～3千人と思われる。沿岸では著しい地殻変動が認められた。地殻変動や津波の解析から、震源域が駿河湾深くまで入り込んでいた可能性が指摘されており、すでに100年以上経過していることから、次の東海地震の発生が心配されている。

・1854年12月24日（安政1年11月5日） 33.0° N 135.0° E M8.4

機内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道：『安政南海地震』：東海地震の32時間後に発生、近畿付近では二つの地震の被害をはっきりとは区別できない。被害地域は中部から九州に及ぶ。津波が大きく、波高は串本で15m、久礼で16m、種崎で11mなど。地震と津波の被害の区別が難しい。死者数千。室戸・紀伊半島は南上がりの傾動を示し、室戸・串本で約1m隆起、甲浦・加太で約1m沈下した。

『1859 年の地震』

○上道村史料【現在の境港市上道町】

飢饉地震大火

安政六年【1859 年】の地震稍大潰屋二三人當死傷なし飢饉は天保六七年にて窮民多く粥を施すこと無数なりしより文久元年の火災は村家十分の八を焼燼せり。

風水近時の猛烈なりしもの明治六年【1873 年】十九年【1886 年】廿六年【1893 年】の三度中にも廿六年の海嘯は枉風暴雨高浪屋の如く海水陸地を浸すもの百間に及ぶ日野川反乱岸本の新大橋を落して海中を轉流すること四里上道の濱に打寄す。

【参考】理科年表（平成 20 年版）

- 1859 年 10 月 4 日（安政 6 年 9 月 9 日） 34.5° N 132.0° E M6.0～6.5

石見：島根県那賀郡で強く、周布村でも潰家や地割れがあった。広島城内でも被害があった。

『時代不詳 鳥取市周辺の津波』

○【改訂国府町誌】平成一六年発行
第二章 民話・伝説 二、大津波

むかしむかし、平和な國府の里の西の空に怪しい雲が出て、賀露の沖から海鳴りが日ごとに大きく聞こえてきた。人々の不安な日が続いた後、ひときわ大きな海鳴りとともに大津波が起り、賀露の浜から鳥取の町を一飲みにして、國府の里にお寄せた。激しく雨の降り続く中、人々は津波に追われて命がけで高いところへかけ上がった。

一宮の社の庭には数千の人が逃げ集まっている、高い石段がつぎつぎに水で見えなくなつた。人々は一生懸命津波の引くのを神に祈つたが、水はついに神殿の庭まで来て避難の足もとを濡らした。それでもしばらくして大ぜいの人の神に祈る声が天に通じたのか、東の空がかすかに明るくなるころ津波の音も少しずつ小さくなり、雨もやんだ。水も徐々に減つていった。

ところで、この津波に最中のときである。岡益の奥の私都に越すところで、溢れた水が私都方面に流れだし、同時に松尾の土堂薬師のお堂の上まで水がきた。このことからちに、岡益の奥を「水越」というようになり、一宮さんの広庭と水越と薬師堂の高さが同一、と語られるようになった。

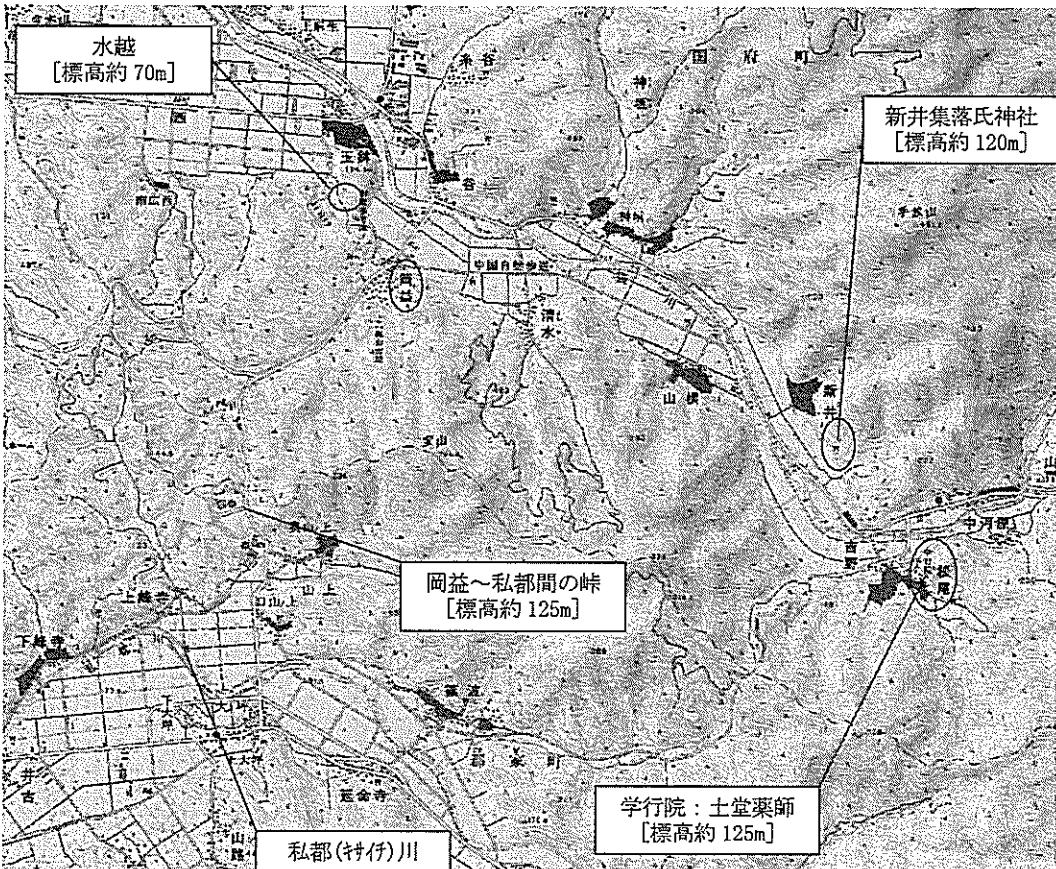
それから津波が引いて二、三日して人々の目に不思議なものが映つた。山の上に小舟が一艘止まっていたのである。新井村の氏神様の右側の山の中腹である。大津波に木の葉のように揺られて打ち上げられたものであろう。人々はこれを見て今更のように津波の恐ろしさを感じた。のちにこの地は「舟山」と名づけられた。

むかしから恐ろしいものに地震・かみなり・火事・おやじと決つておるが、この中にどうして津波が仲間入りしているのかと古老はいつも語つていた。むかしむかしの話である。



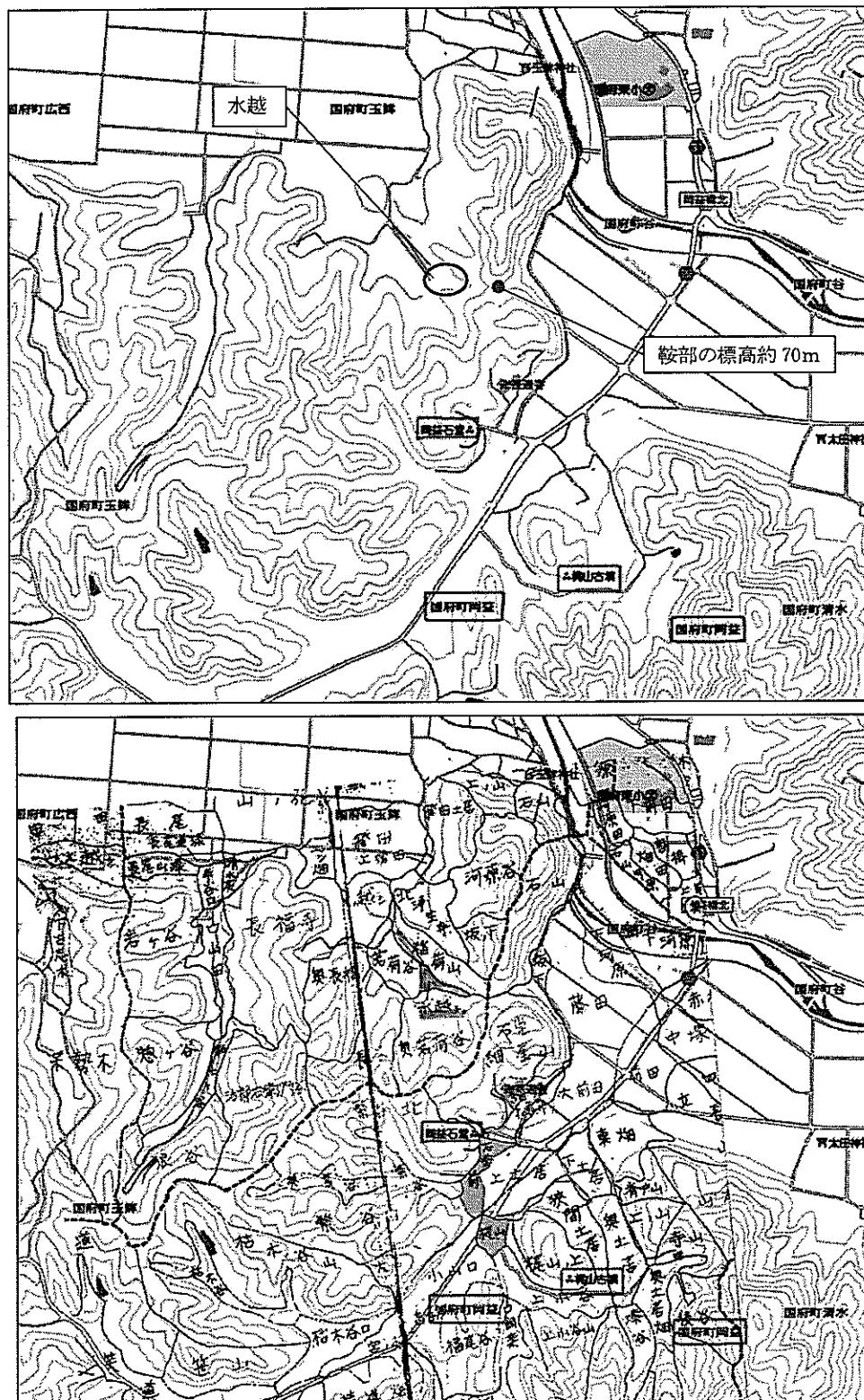


- ・国府町誌によれば、一宮（宇倍神社）と水越と松尾の薬師堂まで水が上がり、これらが同標高とされてい る。
- ・水越是標高 70m 前後である。
- ・松尾の薬師堂と新井集落の氏神社は標高約 120~125m で同標高である。また、岡益から水都へ至る峠の標高は約 125m である。
- ・現在の宇倍神社の境内は標高約 40m である。宇倍神社付近での標高 120m 地点は電波塔付近となる。



『水越』の位置について

字図によれば、『石堂』・『梶山』との位置関係から『水越』は『岡益』西側の尾根（鞍部の標高約 70m）を越えた場所である。



歴史地震の記録（1）

※因…因前年震…終…震終中既氏持生原、震…新近日本地盤監視科

No	年月日	西暦月日	発生時間など	震度※	北緯	東経	M	国名
1 宝永2年5月1日	1702年6月10日	出生の石塁崩れる	田	35.2° N	135.95° E	7.1/4~7.6	山梨・大坂・河内・和泉・近畿・丹波・播磨・淡路・奈良・近江・美濃・伊賀・滋賀・三重・信濃	
2 宝永2年12月10日	1706年1月4日	日の丸(生前103歳)	田	34° N	135.6° E	7.0~7.4	安芸・伊予	
3 元禄11年1月15日	1718年2月1日	房号	田					
4 元禄11年3月1日	1718年9月6日		田					
5 元禄15年3月23日	1732年9月17日	北の方地中震動	田					
6 元禄16年2月8日	1732年3月23日		田					
7 元禄16年2月21日	1732年4月4日	日の丸(生前103歳)、玉の丸(午前)	田					
8 元禄16年2月25日	1732年5月7日	亥の丸(生前103歳)	田					
9 元禄11年9月25日	1698年10月24日	山の丸(生前104歳)	田	33.1° N	131.5° E	6.0	大分県の石垣島など発れる。國旗燃焼、生糞で有感。日に6回。	
10 元禄11年10月8日	1699年11月10日	日の丸(生前110歳)	田					
11 宝永3年2月5日	1702年4月8日	日の丸(生前110歳)	田					
12 宝永3年5月23日	1702年4月26日	日の丸(生前112歳)	田					
13 宝永元年1月23日	1702年1月29日	日の丸(生前112歳)、御慶園	田					
14 宝永3年3月5日	1702年3月29日	吉野	田					
15 宝永3年6月12日	1702年7月21日	夜に入り歩かる。	田					
16 宝永4年12月10日	1702年1月13日		田					
17 宝永4年10月4日	1702年10月26日	朱の丸(生後2時頃)、大地震、波浪 多し。	田	33.2° N	135.9° E	8.6	五輪・七浦	
18 宝永5年3月27日	1703年5月17日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
19 宝永5年9月11日	1703年10月13日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
20 正徳元年2月1日	1711年3月19日	朱の丸(生後2時頃)、花轍。	田	35.5° N	131.7° E	6.5	伯耆・安作	
21 享和2年1月1日	1712年2月5日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
22 享和2年10月8日	1713年1月10日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
23 宝永5年10月16日	1731年1月13日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
24 享和2年2月25日	1714年3月20日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
25 宝永元年2月23日	1702年6月18日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
26 宝永元年2月23日	1702年10月15日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
27 宝永4年2月23日	1705年3月26日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
28 宝永5年2月1日	1705年3月27日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
29 宝永5年10月4日	1705年11月21日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
30 宝永5年10月4日	1705年2月11日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
31 宝永12年2月4日	1706年2月21日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
32 宝永12年10月1日	1706年11月22日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
33 享和5年2月1日	1715年3月10日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
34 享和5年2月1日	1715年3月19日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
35 享和5年3月11日	1715年4月2日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
36 享和5年5月9日	1715年6月5日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
37 享和5年5月22日	1715年6月19日	朱の丸(生後2時頃)、大地震。河 内・佐渡島の波浪が多い。	田					
38 宝永4年1月9日	1707年2月10日	朱の丸(生後10時頃)、大地震。近江	田					
39 宝永4年2月11日	1707年3月20日	比良山、通風穴、通風動	田					
40 宝永5年3月10日	1707年4月3日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
41 天明元年2月1日	1711年2月23日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
42 天明元年5月15日	1712年7月14日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
43 天明元年5月29日	1712年8月3日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
44 天明元年6月9日	1712年7月18日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
45 天明元年7月1日	1712年8月3日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
46 天明元年8月30日	1712年9月5日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
47 享和2年5月10日	1708年6月11日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
48 宝永元年4月17日	1708年5月11日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
49 宝永5年9月30日	1709年1月8日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
50 宝永5年1月15日	1709年7月15日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					
	1709年2月6日	朱の丸(生後4時頃)、大地震。近江	田					

歴史地震の記録（2）

※ 地震…固有年数、津…津浦中島氏生源、震…新日本地質史料

No	年月日	西暦月日	発生時間など	震度※	緯度	経度	M	震源	地名	記載
東洋半島における記載										
51	寛政7年11月24日	1795年 1月 3日	未の刻(午後2時頃)。前代半音子の 大地震。遠日地蔵。	因	35.7° N	134.3° E 5~6			当美町で震の聲が落ち、石塔倒れ、地下水の異常があった。余震が翌年正月まであった。	
52	寛政7年12月19日	1795年 2月 21日	未時頃。	因						
53	寛政8年1月4日	1796年 1月 12日	通震。	因						
54	寛政8年1月13日	1796年 1月 17日	未時頃。	因						
55	寛政9年1月13日	1797年 1月 11日	未時頃。	因						
56	寛政9年1月14日	1797年 1月 12日	未の刻(午後10時頃)。	因						
57	寛政11年2月1日	1799年 1月 16日	未の刻(午後10時頃)。	因						
58	寛政11年3月5日	1799年 1月 9日	未の刻(午後4時頃)。	因						
59	寛政12年2月日	1800年 1月 25日	未の刻(午後4時頃)。	因						
60	寛政12年1月14日	1802年 1月 26日	未の刻(午後2時頃)。大地震。	因						
61	寛政12年10月4日	1802年 1月 3日	未時頃。	因						
62	永和2年10月23日	1802年 11月 18日	未時頃。	因	35.2° N	136.5° E 6.5~7.0			養老半日の正午頃から引れ、名古屋で本町町内四の土間の水引れ、萬葉崩れる。遠波が河内有感。	
63	寛和2年5月23日	1803年 5月 14日	未時頃。	因						
64	寛和2年7月9日	1804年 7月 10日	未時頃。	因						
65	寛和2年9月9日	1804年 9月 7日	未の刻(午後10時頃)。五の刻(午後	因						
66	文化5年10月16日	1808年 12月 3日	未時頃。	因						
67	文化6年5月17日	1809年 5月 20日	未の刻(午後10時頃)。	因						
68	文化6年5月22日	1809年 5月 25日	未の刻(午後10時頃)。	因						
69	文化6年5月30日	1809年 6月 23日	未の刻(午後10時頃)。	因						
70	文化6年3月10日	1810年 4月 21日	未の刻(午後10時頃)。	因	33.5° N	133.5° E			高知では土壁剥落も、瓦下、場の屋敷があつた。中村の方が遠かたともいう。	
71	文化6年1月24日	1813年 2月 24日	未の刻(午後10時頃)。	因						
72	文化10年5月8日	1813年 6月 1日	未の刻(午後10時頃)。	因						
73	文化12年2月1日	1815年 3月 1日	未の刻(午後10時頃)。地震甚れ。	因	36.4° N	136.5° E 5~6.0			小糸城の赤松多く、枝垂銀杏の庭園等で香草が香った。金沢で強かつた。	
74	文化12年1月8日	1816年 2月 1日	未の刻(午後10時頃)。	因						
75	文政2年5月15日	1819年 3月 10日	未の刻(午後10時頃)。地震甚れ。	因						
76	文政2年12月12日	1819年 6月 2日	未の刻(午後10時頃)。地震甚れ。	因	35.2° N	136.5° E 7.1/4			伊勢・美濃・近江	近江八幡で震度8.2、死者5、木曾川下流で津波(多度川)で40軒全壊、金沢では油井寺焼れ庄内10名古屋・大山・西日山・彦根などのほか、金沢・郡家・出石・丹波・尼野山などでも被害。
77	文政4年5月1日	1821年 5月 2日	未朝。地震甚れ。	因						
78	文政4年5月1日	1823年 5月 1日	未の刻(午後10時頃)。	因						
79	文政4年6月26日	1823年 6月 5日	未の刻(午後10時頃)。	因						
80	文政5年7月7日	1823年 9月 15日	未の刻(午後10時頃)。	因						
81	文政7年2月1日	1824年 3月 1日	未の刻(午後10時頃)。	因						
82	文政10年6月12日	1827年 5月 4日	未の刻(午後10時頃)。	因						
83	文政10年1月6日	1828年 3月 21日	未の刻(午後10時頃)。	因						
84	文政10年1月7日	1828年 3月 23日	未の刻(午後10時頃)。	因						
85	文政13年1月日	1830年 6月 19日	未の刻(午後10時頃)。大地震。日勢。	因	35.1° N	136.6° E 6.5			京都および奈良	京都および奈良。上下から強く、危険が非常時に多かつた。朝所・二条城などで被害。
86	文政13年11月6日	1830年 12月 20日	未の刻(午後10時頃)。震烈。	因					京都での被害。	
87	文政14年4月9日	1833年 5月 27日	未時頃。	因	35.5° N	136.6° E 6.1/4			豊原西岸	大垣北方の方の村々で川流れ多く、瓦壊など。
88	文政14年6月28日	1833年 6月 10日	未の刻(午後10時頃)。	因						
89	文政14年9月1日	1833年 10月 11日	未の刻(午後10時頃)。	因						
90	文政14年10月1日	1833年 10月 13日	未の刻(午後10時頃)。	因						
91	天保6年10月25日	1833年 12月 8日	未時頃。	因						
92	天保6年12月1日	1833年 12月 15日	未の刻(午後10時頃)。	因						
93	天保7年1月28日	1834年 1月 31日	未時頃。	因						
94	天保8年3月3日	1837年 4月 5日	未の刻(午後10時頃)。	因						
95	天保10年1月1日	1839年 1月 31日	未時頃。	因						
96	天保11年1月1日	1840年 2月 23日	未の刻(午後10時頃)。	因						
97	文政7年7月1日	1855年 9月 18日	未時頃。	因						
98	文政2年7月12日	1855年 9月 24日	未時頃。	因						